

2020 年度 大学入試改革（1）

5年後の2020年度実施分（2021年度入試）から、つまり**現中学1年生**からセンター試験は廃止される予定です。

センター試験が廃止されると、大学入試はどのように変わるのでしょうか。

センター試験に代わるものとして、高校教育の基礎的学習の達成度を把握する「高等学校基礎学力テスト（仮称）」と、今のセンター試験と同レベルの「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の2種類の試験が導入される予定です。どちらも在学中に複数回受けられるようになる予定です。

「高等学校基礎学力テスト」は推薦入試やAO入試の資料として使い、「大学入学希望者学力評価テスト」は、1点刻みの点数ではなく、5～10段階程度のランク別評価とし、（例えば、100～91点であればAランク、90～81点であればBランクというようなイメージです）高校在学中に複数回実施します。

それに伴い、大学の個別学力検査（現在の国公立大学で言う2次試験）も変わります。義務ではありませんが、個別学力検査もこれまでのような学力試験ではなくて、面接や小論文などで人間性を見るように推奨しています。

（それを行った大学には文部科学省から補助金を今より増額すると伝えていきます）

しかし、大学によっては受験者が1万人を超えるところもあるので、大学が全ての受験者を面接するというのは実際には難しいでしょう。1日～2日で済む話ではないからです。

現在はどの大学からも、個別学力検査をどのようにするかという返答は出ていないので、今後の発表に注意しておく必要があります。

現在、全国の大学のうち、およそ100校（私立大学では6校に1校）が入試問題を予備校などに外注しています。自分の大学では入試問題を作る能力がないからです。そういった入試問題作成のノウハウがない大学が、補助金が増額されるとは言え、面接や小論文試験に切り替えることは、容易ではないでしょう。

これまでのセンター試験の制度であれば、高校1年～高校2年までは、入試

をあまり意識せずにのんびりすることができていました。高校3年の1月に実施されるセンター試験の時に結果を出せば、それで良かったからです。

ところが、センター試験がなくなり、学力評価テストが始まると、それは許されなくなってしまいます。

在学中に複数回の学力評価テストが行われるということですが、これは問題の漏えいを防ぐため、全国で同日に行われるはずで、そうすると、少なくとも普通科の高校は全て、学校の授業自体がその試験に向けたものに標準化されていきます。

当然高校にとっては、その試験でどれだけ点数を取らせるかということが重要になってくるからです。そうすると、**普段の学校の授業の予習や復習をきっちりしていくことが、そのまま受験対策に直結**します。

注意しないといけないことは、現中学1年生からこの制度が導入されれば、早ければ高校2年の夏休み明けあたりに、学力評価テストが行われるかもしれません。

そうすると、現中学2年生より、現中学1年生の方が先に大学受験を迎えてしまうことになるのです。**現中学1年生は、早ければ4年後に大学入試**が始まってしまうのです。

もう一つ、こうした受験システムが変更するときの注意点として、その前学年である現中学2年生は大学受験で浪人することが非常に難しくなります。

浪人生向けの大学入学希望者学力評価テストが行われるとは思いますが、システムの変更時に浪人してしまうと、その入試のシステムに合わせて勉強をやり直す必要が出てきます。その労力はとても大変なものになり、負担が大きくなります。とても浪人はできません。

そのため、**システムが変わる前学年の現中学2年は全体的に学力が高くなり、大学受験が非常に厳しい学年**となることが予測されます。

過去に共通一次試験が導入されたときにも同様の現象が起きました。

大学入試時に大学入学希望者評価テストが導入される中学1年生以下の生徒は、今からどういう勉強をしていくか、ということを真剣に考えなければなりません。なぜなら、大学受験は高3の冬ではなく、高2の夏に始まると予想されるからです。

入学希望者学力評価テストはおそらく、センター試験と同様に全教科を対象に行われるでしょう。英語や数学だけでなく、早い段階から入試に必要な全教科の勉強が必要となります。

さらに、高校の早い段階で試験を行うため、高校入試で培われる 5 教科の力がとても重要になります。そこまでに身に付けた力が大学入試に直結すると考えてよいでしょう。

つまり、**中学の勉強が高校受験と大学受験の両方に影響してくるため、今まで以上に中学生時代の勉強が重要**になってくるのです。

本改革は、「明治維新」級の大改革です。「知らないは悪」です。確実に損をします。飛燕ゼミとしては、折に触れて情報発信していきたいと思えます。

平成 27 年 8 月